
君の存在の大きさ

表

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の存在の大きさ

【Zコード】

N7183A

【作者名】

表

【あらすじ】

気が付けばいつも傍にいた彼・・・江戸川コナン・・・組織が壊滅した次の日彼は私たちの前から姿を消した・・・

プロローグ

気が付けばいつも傍にいた彼・・・

江戸川コナン

組織を壊滅させた次の日・・・

彼は私たちの前から姿を消した・・・

プロローグ（後書き）

初投稿します。表です。
まだまだ未熟ですが頑張りたいと思います
ちなみにコ哀です

彼が消えた日

哀「やつぱり」の姿で生きていくしかないのね・・・」

私は結局彼を戻せなかつた。工藤新一の姿に・・・

昨日組織は壊滅した。たくさんの人々のおかげで

私を初め、博士、服部君、黒羽君、警視庁やFBIの人たち、工藤君の両親・・・

そして江戸川コナン・・・

ベルモットやウォッカの死亡も確認された。しかしジンだけは確認されなかつた。

解毒剤のデータも見つからなかつた。

今日もいつもと変わらない日々だと思っていた

哀「博士、行つてくるわね」

博士「気をつけていくんじやぞ〜」

玄関を開けると「よお、灰原」と声を掛けてくれる彼

そう、いつも居る筈の彼

でも今日はいない

「どうしたのかしら・・・」

まあ気にすることないと阿笠邸を後にした。

一人でしばらく歩いていると

? ? ? 「哀ちゃん」

? ? ? 「灰原」

? ? ? 「灰原さん」

聞き慣れた声が聞こえる

私は後ろを振り向いた。そこには少年探偵団の歩美、元太、光彦がいた。

哀「おはよう・・・」

私は微笑みながら言つた。

光彦「おはよう」ぞいます。あれ、コナン君いませんね・・・」

歩美「哀ちゃん、どうして？」

哀「ああ、知らないわ・・・」

本当は私が一番知りたいはずなのに・・・

歩美「コナン君のことだから大丈夫だよね」

哀「ええそうね」

彼のことだから心配ないと思った。そう思いたかった。

そして彼のことを考えながら学校へ向かつた。

私の隣の席は彼だが今は空いてる・・・

（本当にどうしたのよ・・・）

そんなことを考えている時

がらつ

教室のドアが開く。

先生が入ってくる

小林「・・・みなさんにお話することがあります。江戸川君が行方不明になりました・・・」

（え・・・）

（工藤君が・・・行方不明・・・？）

私は先生の言葉の意味がわからなかつた。

私は我に返り咄嗟に立ち教室を出た。

「灰原さん！」

みんなの呼ぶ声が聞こえる。しかし私はそれどころではなかつた。

哀「はあ、はあ・・・博士！..」

博士「哀君、どうしたんじゃそんなに慌てて・・・」

哀「工藤君が行方不明ってどういうこと」

博士を睨む様にして聞く。

博士はしばらく黙り込んだ。

博士「すまん。哀君、わしも詳しいことは知らんのじや・・・」

博士は申し訳なさそうに答えた。

博士は戸棚から

博士「実は新一から哀君宛の手紙があるんじや」

そう言いながら一枚の封筒を取り出した。

哀「貸して！！」

私は怒鳴り声で言った。

そして奪い取る様にその封筒を取つた。

その手紙の内容とは・・・

彼が消えた日（後書き）

こんな文ですみません・・・
未熟ですが
これからも頑張って書いていこうと思っています

彼の想いと私の想い

私の頭の中にはいろいろな彼との思い出が蘇つてくる。

彼と初めて出会ったこと

杯戸シティビルのこと

バスの爆発から私を救ってくれたこと・・・

ビリッ

私は勢いよく封を開けた。

その中には一枚の手紙が入っていた。

私は複雑な気持ちだった。

私はそれを取り出し読み始めた。

『灰原へ

お前がこれを読むんでは俺はここにいないな。
悪い・・・突然いなくなつちまつて。

お前を必ず守るって言つたのに・・・

俺が姿を消したのは元の姿に戻れないからじゃない。

前に言つたよな。運命から逃げるなつて。

運命から逃げないお前を見て俺も運命から逃げるのをやめた。

俺はジンを追う。組織とのケリをつけるために・・・

組織を潰すのが俺の運命だから。

俺の気持ちをお前に伝えたい。

ここで言わないと後で後悔するから・・・

俺は灰原が好きだ！蘭よりも

いやこの地球上の誰よりも・・・

でもお前はこういうだらうな

「どうして私なの？あなたには彼女がいるでしょ！」って。
蘭にはすまないと思つてる。

ずっと待たせておいて・・・

だけど江戸川コナンとして

俺が今までお前を守ってきたのは

解毒剤を飲んで蘭の傍に行きたかったから・・・

そう思っていた、けど違った。

俺はただお前が好きだから

お前を失いたくないからだと気付いた。

俺は灰原哀、富野志保を忘れない。

・・・けど灰原

お前は江戸川コナン、工藤新一を忘れてくれ・・・
さよなら

江戸川コナン』

ポタツ ポタポタポタ

私の目から涙が出てきた。

流したくもないのに、自然と出てしてしまう。

(サヨウナラ・・・)

私の中で響き渡る言葉。

彼から一番聞きたくなかった言葉。

私は前に言った。

お互の気持ちに針を刺す哀しい言葉・・・

彼からその言葉を聞くとは思わなかつた。

聞きたくなかつた・・・

でもそんな彼は私を好きだと言つてくれた。幼馴染の彼女よりも・・・

・

彼はこんなにも私を想つていてくれた。

けど私は・・・

彼に何もできなかつた・・・してあげられなかつた・・・

彼はもういない。

私の傍に帰つて来てはくれない。

あの優しい表情で、優しい声で

彼は私を呼んではくれない。

そう思うとまた涙が出てきた。

博士はそんな私を悲しい表情でみていることしかできなかつた。

ピンポン

とインター ホンが鳴つた。

哀「博士・・・出で・・・」

私は涙声で言つた。

博士「哀君・・・」

悲しい表情でそう言つと博士は玄関を開けた。

? ? 「じいさん！」

? ? 「阿笠さん！」

聞き覚えのある声

そこに立つていたのは

西の名探偵服部平次と怪盗キッドの黒羽快斗だつた。

服部「工藤が行方不明つてどういうこいつちやー!?」

黒羽「新一の身になにがあつたんですか?」

服部と快斗は信じられないといった表情で言つた。

博士はしばらく黙り込んだ。

そして何か決意した表情で話した。

博士「哀君。あの手紙見してくれんか?」

私は背中を向けながら無言で頷いた。

博士は側に落ちていた手紙と封筒を拾い彼らの元へ持つていった。

服部「泣いとんのか？ちつこいねえーちゃん」「黒羽「哀ちゃんがどうして？」

博士は溜息をつき封筒と手紙を差し出した。

服部・黒羽「これは？」

博士「新一の手紙じよよ・・・」

二人は驚いた顔をした。

服部「なんで工藤が手紙なんか・・・」「黒羽「阿笠さん宛ですか？」

博士「・・・哀君宛じや」

服部「ホンマか！それ」

明らかに動搖してる服部。

黒羽「・・・読んでもいいですか？」

冷静な快斗、あまり動搖はしていなかつた。

博士「ああ、もちろんじや」

そう言うと快斗に手紙を渡した。

快斗は受け取るとすぐに読み始めた。

しばらくして読み終わり手紙を封筒に戻した。

服部も隣でそれを見ていた。

服部「・・・ホンマどうしようもないやつちゃなあ～」

黒羽「哀ちゃんが泣いてた理由はこれだつたんですね・・・」

快斗はそう言うと灰原の方へ向かつた。

黒羽「哀ちゃん」

後ろから声がした

私は俯きながら彼の方を向いた。

彼はしゃがみ私の髪を優しく撫でてくれた。

私は顔を上げることができなかつた。

彼は髪を撫でながら話かけてきた。

黒羽「哀ちゃん、新一は必ず君の傍に帰つてくる。

だから君も新一のことを忘れないでほしいんだ・・・

哀「黒羽君・・・」

私は顔を上げながら答えた。

黒羽「そんな顔をしていると名探偵に笑われますよ?」

彼は微笑みながら言った。

哀「ええ・・・そうね」

私も微笑みながら答えた。

彼が無事に帰つて来ることを信じて・・・

彼の想いと私の想い（後書き）

こんな手紙の内容ですみません・・・
コナン君は無事に帰つて来るんでしょうか?
それではこの後も頑張つて書きたいと思います。

彼がいなくなつて六年が経つた。

私たちは小学校の課程を修了し、中学へと進んだ。

人々は充実した幸せな日々を送つていた。

蘭さんは高校を卒業してから新出さんと結婚し幸せな家庭を築いた。

ずっと待ち続けていた。

工藤新一ではなく・・・

服部君や黒羽君も幼馴染の彼女たちと幸せに暮らしている。

？？「哀ちゃん」

？？「灰原さん」

？？「灰原」

後ろから聞こえてくる聞き慣れた声

明るい性格でくりくりとした大きな瞳が特徴の吉田歩美

丁寧な言葉遣いで頭脳明晰な円谷光彦

ひとりわ目立つ体を持つ丸坊主の少年小島元太

哀「あなたたち・・・」

私は彼らを知つてゐる。

彼らとはこの六年間ずっとといつしょだつたから。

歩美「今日から私たち中学生だね。」

光彦「ええ！でも中学生は忙しいですよ～文化祭とか、受験とか」

元太「まじかよ！俺小学生に戻りてえ・・・」

彼らは楽しそうな表情で話していた。

私はそれを寂しげな表情で見ていた

なーに暗い顔してんだよ

(え・・・?)

私は後ろを振り向いた。

だがそこには誰もいなかつた。

(・・・気のせいね)

歩美「哀ちゃん~何してるの~おいでや~」
遠くの方から声が聞こえる。

哀「今行くわ」

そう囁きながら彼らのいる所に向かった。

入学式も終わり私は帰るために校門を出ようとしました時

? ? 「哀ちゃん!」

後ろから聞こえてくる走る音と明るい声

哀「吉田さん」

歩美「はあ、はあ・・・・いつしょに帰ろうつい」

彼女は笑顔でそう言つた。

哀「じめんなさい・・・今日ほんまに帰れないの」

歩美「どうして?」

彼女は首を横に傾げた。

哀「寄る所があるの」

歩美「どこに寄るの?」

彼女は相変わらず首を傾げたままだつた。

哀「・・・お墓」

歩美「あ・・・」

彼女はそう呟いた後悲しい表情をした。

哀「あなたがそんな顔しなくていいわ」

私は微笑みながら言った。

歩美「ありがとう。哀ちゃん」

彼女は私にそう言ってからいつもの明るい顔になった。

歩美「じゃあ気をつけてね」

彼女は手を振りながら言いそして走り出した。

私は優しげな表情で彼女の背中を見ていた。

私は花を持ち、墓へと向かつた。

私の姉、富野明美が眠る墓へ

しかし私は信じられない光景を目にした。

彼がいた・・・

六年前、私たちの前から姿を消した・・・
私が待ち続けた・・・

江戸川コナンが・・・

私はその場に立ち留まってしまった。

（早く逢いたい・・・）

逢つて私の気持ちを伝えたかった。

でも

私は複雑な気持ちを抱えながら木陰で彼の様子を見ていた。

彼は姉の眠る墓に語りかけた。

コナン「明美さん・・・久しぶり。

ごめん。あの時助けられなくて。

あの時助けることができたら・・・」

そう呟いた後俺の頭に思い出される彼女の言葉

どうしてお姉ちゃんを・・・助けてくれなかつたの？

あなた程の推理力があればお姉ちゃんの事ぐらい簡単に見抜けたはずじゃない！

なのに・・・ジーしてよー！

そう・・・

彼女が俺に初めてを見せた素顔。

初めて見せた彼女の涙・・・

コナン「・・・俺はもうあいつの涙を見たくない。
でも俺が傍にいるとあいつは辛い顔しかしない。
辛い顔しかさせてない・・・」

彼は俯きながら呟いた。

そして彼の顔から白い透明な粒が落ちた。

彼は泣いていた。

何もかも見透かしたようなあの瞳から
人の前では見せない彼の素顔。

私の前でも、彼女の前でも見せなかつた・・・
とても悲しい素顔。

コナン「ごめんな・・・志保」

彼は涙声で呟いた。

違う

あなたのせいじやない・・・

あなたの前で本当は笑いたい。

でも私はあなたから幸せを奪つてしまつた。

大切な彼女と共に過ごせる時間を

そして工藤新一として過ごす時間を・・・

私は胸が痛くなつた。

彼を見るのが辛かつた。

「ごめんなさい・・・」

私は小さく咳き元来た道を歩き始めた。

「！」

(この声・・・)

俺が一番聞きたかった声がした。

愛しい彼女の声が。

「はい・・ば・・ら?」

コナンは木陰の方を向いた。

だがそこには誰もいなかつた。

遠くの方に人影が見えた。

しかしその人影はだんだん小さくなつていった。

コナンは走りだした。

その人影が彼女だったから。

傍に居たいとずつと思っていた彼女だったから

逢いたい

俺の頭の中はその言葉だけだった。

「はあ、はあ・・・」

走り出してだいぶ時間が経っていた。

(灰原・・・どこ行つたんだ・・・)

俺の頭の中は彼女のことだけだった。

「くそ！」

俺は叫んだ後また走り出した。

私は一人で元来た道を歩いていた。

(彼に会いたかったのに・・・)

私は自分の行動に後悔した。

本当は傍に居たかった。

彼の傍にずっと居たかった。

けど私は彼に辛い思いしかさせていられない。

あの時見た彼の素顔。

彼のあんな顔は見たくなかった。

涙を流した悲しい表情は。

「『めんね。くど・・・』

「誰にあやまつとのや?ねえーちゃん。」

私の言葉は遮られた。

明るい声の関西弁で。

「服部君! ?どうしてここに?..?」

私は驚きを隠せない。

「いやーたまたま和葉と遊びにきとつてな。

それでねえーちゃんの後ろ姿が見えたから

話掛けたんや

「彼はいつも調子で答えた。

「それで和葉さんは?」

私はいつもの表情で聞いた。

「ああ、あいつなら先に毛利のねえーちゃんと一緒に行つとるで」

「そうなの」

私はそう呟いた後右の方へ目を向いた。

目を向けた途端、私は呆然とした。

彼がいたから・・・

私は自然と歩み出そうとしていた。

前へ進もうとした瞬間

ドンッ

私は背中を誰かに押され道路に押し出された。
その時すごい速さで車が向かつてきた！

「ねえーちゃん！！」

服部は大声で叫んだ。

灰原は恐怖を感じた。

(私・・・死ぬの・・・?)

誰もが手遅れだと思つていたその時！

「灰原！！」

コナンは灰原を突き飛ばした。

(く・・どう・・く・・ん?)

私は氣を失つてしまつた。

コナンの体が鈍い音と共に打ち上げられた。
そして地面に叩きつけられた。

彼の体は血で赤く染まっていた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7183a/>

君の存在の大きさ

2010年10月10日16時01分発行